速さの天才

前へ特別編

今年新たなカテゴリーで、さらに前を目指すレーサー・水野昇太。勝負のときを迎えた、彼のレーサーとしての心境が、今ここに明かされる!?

出席者　水野昇太（ライバルは伊藤みどりのスピン野郎）
小宮山祥広（巨体を誇る、ある意味で天才ライター）
内藤貞保（いろんな意味で人災カメラマン）
西崎修平（家裁が必要かも知れないディレクター）

昨年5月号から連載されている『前へ』で、もうお馴染みのプロレーサー・水野昇太。新年を向かえ、昨年一年間彼を追い続けたスタッフとともに、改めて彼のレーサーとしての過去、現在、未来、そして彼の魅力について語り合った。

小宮山　昨年は本当にご苦労さんって感じの一年だったね。

水野　そうですねぇ、いろんなことがありましたから。せっかく取材にきてもらったときに予選でコケたりとか…。

内藤　もうちょっとのところで入賞を逃したりとかね。

西崎　我々の間では昇太を"取材にいかないと好成績を出すテレ屋さん"などと陰で密かによんでおりました。

小宮山　結構、プレッシャーに弱いタイプなのかなぁっていってたんだよ。

水野　いや、プレッシャーに弱いということは絶対にないです。僕は多少のプレッシャーがあるほうが燃えるタイプの人間ですから。だけど、昨年はすべてにおいてプレッシャーの固まりみたいな年だったんですよ。

西崎　プレッシャーの固まりって？

水野　一番大きかったのは、マシンがベストの状態で乗れたことがほとんどなかったことですね。レース開幕直後はマシンの調子はよかったんですけど、夏前あたりからアソコをいじればココがだめなんて調子で、決勝レースはいつもマシンにどこかハンディがあったんです。

小宮山　マシンが悪かったから勝てなかったっていうの？

水野　そんなこといってませんよ。メカニックはいつもがんばってくれたし、僕自身もレース寸前まで調整した結果、どうにもならなかったというだけです。だから後半はニューマシンに乗ったんですけれど、大切なレースが続いてましたからほとんどテストなしで、ぶっつけ本番といったレースになってしまったんです。正直、どのレースでも自分の実力が出せなくて苦しかったんですよ。

小宮山　うん、確かにその苦しい感じは、取材していていつも昇太から伝わって来てたね。ところで、そんな苦しい一年の中でも、ワーストレース、思い出したくもないくらい自分の走りができなかったレースは、どのレース？

水野　一番記憶に新しいのは、12月5日のFJ最終戦ですけど、そうだなぁ、やっぱり11月28日の富士で走ったインターナショナルF3でのレースですね。

西崎　ああ、あのレースね。あれは僕も行ってメインスタンドで見ていたけど、"惜しい"というより、どうしたんだよ、って感じだったもんね。素人目にも実力が出ていないのがわかったよ。あれは、やっぱりカテゴリーが上の世界の名だたるF3のチームが見ていたから、萎縮した？

水野　そんなことないですよ。たかがF3の世界のトップ選手が見ているというだけで、萎縮するほど僕はヤワじゃないです。しいていうなら、萎縮というより、むしろその逆ですね。僕が思ってたのはここで誰よりも速く走って、あいつ速ぇなァ、って認めさせてやろうと思って走ったんです。

小宮山　それじゃ、あのレースはその気持ちが空回りしてしまったということ？それじゃあ結果的にはやっぱり精神的に萎縮したってことになんないかなぁ。

水野　確かに結果が結果（11位）でしたから、そう思われても仕方がないんだけど、本当に精神的に萎縮してたわけじゃないんですよ。なんていえばいいのかなぁ、一言でいえば、熱くなり過ぎたっていうことですかね。ただがむしゃらに120%を出し切って走ったのがいけなかったんですよ。これは余りいいたくないんですけどね。

内藤　なんでですの？　がむしゃらに力を出し切るっていうのは、男らしいでカッコええやないですか。

水野　いや、そんなカッコいいもんじゃないんですよ。僕の場合は、これをいっちゃうとそれまでの自分に心理的テクニックが足りなかったことがバレちゃうから（笑）

小宮山　もうそのことは「前へ」の中でかなりバレてるよ（笑）。それより、そのがむしゃらな120%の走りとか、足りなかった心理的テクニックってどんなこと？　たぶん、読者も知りたいだろうし、もうちょっと具体的に話してよ。

水野　いや、そう改まって聞かれてもたいしたことじゃないんですよ。僕がいつも自分の能力の限界を出し切って走ろうとマシンに乗ってるのはわかってもらってますよね。自分の持てる力を120%出し切る。それが僕のレーサーとしてのポリシーなんですけど、このレースはそれ以上にぶっちぎりの速さを見せなければと思ったんです。だから肉体的にも精神的にもギリギリのところまでもっていって、120%＋アルファーの力で走ったんですよ。

西崎　そのプラスアルファーが問題だったんだ？

水野　いや、そうじゃないんです。プラスアルファーの能力を引き出すことは誰よりも速く走ることに不可欠なことなんですけど、マシンがそれについてきて初めて生きることなんです。富士で乗ったニューマシンは、常に僕のプラスアルファーを受け止められるほど完成されてなかったんです。あのマシンはコーナーリングの性能が80%しかできあがってなかったんですよ。

小宮山　それは、他のマシンに比べてコーナーで80%の力しかだせないということ？　プロレーサーなら、それをいったらいけないんじゃないのかなぁ。だってそれはレース前からわかっていたことなんだから。

水野　いえ、マシンの性能うんぬんをいっているんじゃないんです。これからはどんなマシンでも乗りこなせなければ、カテゴリーを上げていけないですから。それよりも僕がいいたいのは、そのことをわかっていながら、すべて、つまりストレートもコーナーも全部120%の力で走ってしまったことなんです。120%がむしゃらでコーナーを走れば当然無理が生じる。それをわかってて無理をした自分のテクニックのなさをそこで実感したんですよ。冷静に考えれば、富士での組み立てはこうです。ニューマシンはストレートは速いマシンだってことはわかってるんで、ストレート120%＋アルファー、コーナーは80%のペースでいけばいい、ということになるわけです。けど、あのときは……

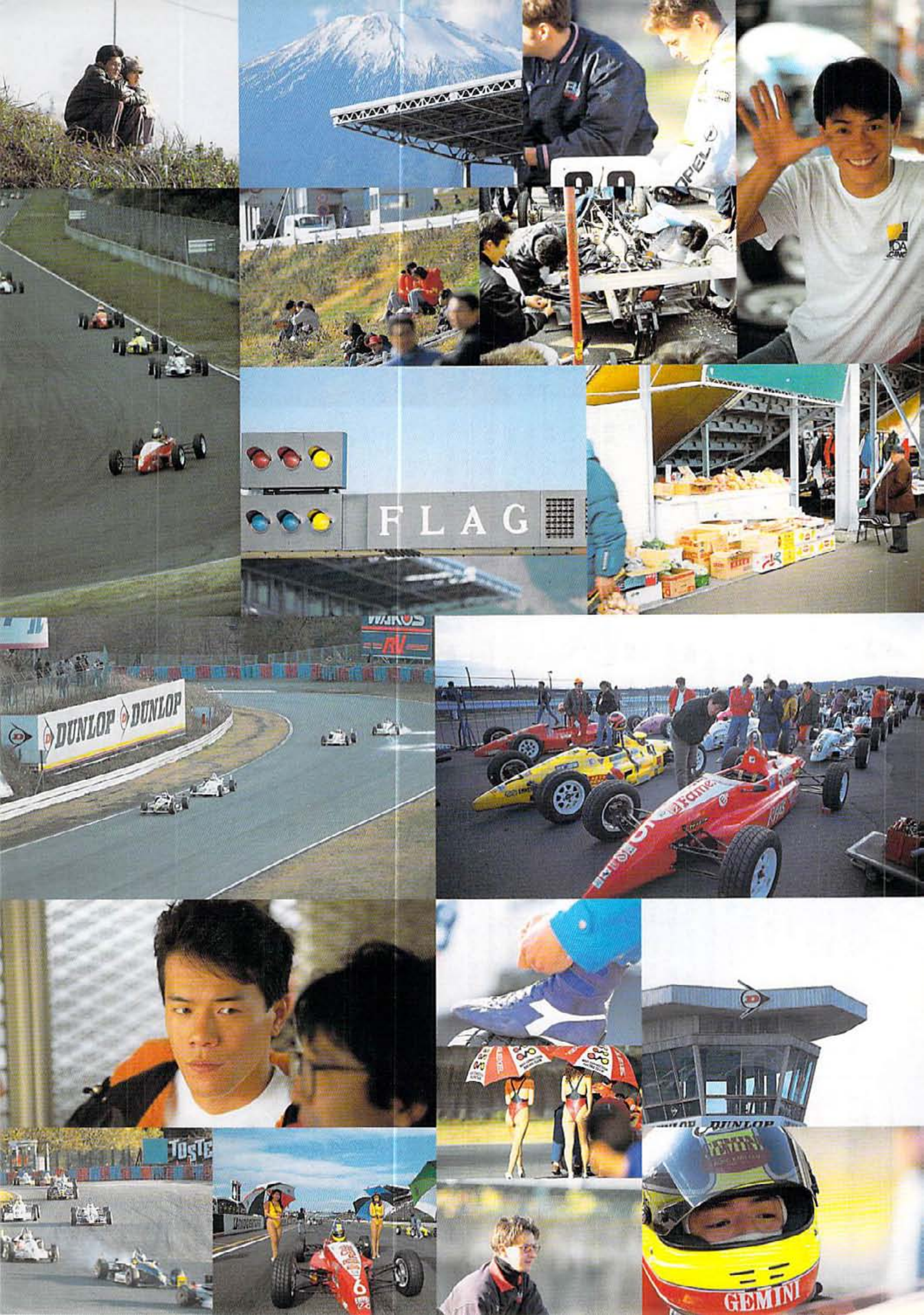
西崎　そこを120でいっちゃったと、そのペース配分の考え方が心理的テクニックか。

水野　そうです。今までは"すべて全力"で何とかいけたんですけど、それぞれのマシンの機能によって、確実なペース配分がプロレーサーには本当に必要なんだと、改めてあのレースで体感できましたね。

内藤　あのレースはホンマに残念でしたよね。あそこでF3のチームに速いとこ見せつけといたら、今年はF3に上がったはったはずやのにね。

水野　残念に思っていないといったら、多少嘘になるけど、周囲の人たちが思っているほど、正直、僕自身は残念と感じていないんです。だってね、それは僕の目標はF3のマシンに"乗る"ってことじゃないですから。

小宮山　それはどういうこと？　とりあえずF3のマシンに乗れれば、ひとまずステップアップしたことにはなるんじゃ


FLAG
DUNLOP
DUNLOP
GEMINI

速さの天才

たいていの人は誰でも普通の人より天才に憧れるでしょ。
僕はレーサーになる前から、
天才に憧れる普通の人よりも、
自分が天才であればいいと思っていたんです。

ないの？

水野　ね、ね、普通そう思うでしょ。でもね、F3のマシンに乗りさえすれば、それがどんなマシンでもステップアップしたことになる、なんて僕は思ってないんです。

小宮山　じゃぁ、昇太にとってF3にステップアップするってどんなこと？

西崎　そりゃあ2階から3階にあがることでしょう。

内藤　うわぁ、こういう場合、僕どうしたらエエんやろ。

（一同笑）

水野　F3がFJと違う大きなポイントは、マシンの性能だけじゃないんです。一番FJよりいいところは体制が整っているチームが多いということなんですよ。だけど、常勝を狙えるチームもある反面、当然、体制が整っていないので取り敢えず走っているだけのチームもある。だから、ただ乗るだけならお金さえもっていれば、普通の人でもF3に乗ることはできるんですよ。

小宮山　へぇ、お金さえ持ってれば僕でも乗れるの？

水野　そうです。ただ、たぶん小宮山さんの貯金の100倍ぐらいは必要ですけど。

西崎　そんならタダで乗れるんじゃねーか。

水野　え!?　何千万とかかるんですよ。

西崎　だって小宮山センセの貯金でしょ。そんなもん100倍したって1万倍したってゼロはゼロ（笑）。

内藤　お金もお金やけど、だいたい小宮山さんではコックピットに入れませんやん。

（一同笑）

水野　だから、別にレーサーとして速くなくても、チームへお金をもっていけば、体制のできていない"とりあえず乗れ"といった感じのチームのF3になら乗れるんです。けど、それにはプロレーサーとして大きな問題があるんですよ。

内藤　プロレーサーとしての問題って何ですの？

水野　速いからレーサーなんであって、お金だけで乗るなら普通の人なんです。そういう人にはチームは"乗せてやってる"っていう態度をとるんです。そんな形をとると自分のマシンのセッティングやなんかに口も出せないんですよ。本当はそれじゃぁ速く走れない。だけど、そういうチームは前にもいったけど、もともと勝とうだなんて思ってないからそれでいいんです。そんなチームじゃF3に乗ってもプロレーサーとしての価値はないですよ。

西崎　確かにそうだね。オリンピックじゃないんだから。じゃぁ昇太は、プロフェッショナルとしてF3にどうやって乗ろうと思ってるの？

水野　簡単にいうと"乗せてもらう"というより"乗ってやる"といった感じですかね。ようするに自分が走りたいチームは自分で選ぶ。つまり"金はある、オタクが速く走れるチームなら乗ってもいいけど"で選ぶほうが、僕にとって本当にF3にステップアップしたことになるんですよ。まぁ、理想はそうなんですけどね。

西崎　だから昇太は今、F3のチーム周りをすることよりもスポンサー探しに重点をおいてるわね。

水野　そうです。"乗せてください"なんて頼み込まなくても、僕にスポンサーさえあれば、体制のいいチームで乗ることができるんです。

小宮山　それで、今年はF3に乗れなくても後悔はしていないというワケなんだ。けどね、実際この不況の中で、スポンサーってなかなか見つからないんじゃない？

水野　そうなんですよ。4〜5年前の景気のいいときなら、喜んでお金を出してくれてた企業も、今はなかなか……。なんたってホンダですらF1から撤退する御時世ですしねえ。だけど、そんな状況でもスポンサーを見つけることもプロレーサーとしての仕事のひとつなんです。

内藤　プロレーサーってテクニックがあればいいというもんやないんですね。

水野　そうなんです。テクニックと同じくらい、自分自身にスポンサーをつけるということがプロレーサーには必要なんですよ。特に誰よりも"速く"走るためには……。

小宮山　確かにスポンサーを見つけるのは大変だろうね。話は変わるけど昇太と話をすると必ず"速く"という言葉がでてくるけど、どうしてそこまでこだわるの。レーサーだからというのはわかるけど、いったい昇太のいう"速さ"ってどんなものなのかなぁ？

水野　前にもいったけど、レースは勝負なんですよ。勝たなければただの普通の人、勝ってこそプロのレーサーなんです。レースの中では一番速いヤツがプロなんです。

西崎　速くないヤツは、レーサーじゃない？

水野　そうです。たいていの人は誰でも普通の人より天才に憧れるでしょ。僕はレーサーになる前から、天才に憧れる普通の人よりも、自分が天才であればいいと思っていたんです。頭の方はどうも天才ではなかったようだけど（笑）。だからレースを始めたときから速さの天才であろうと思ったんですよ。誰よりも一番速いという天才に…。

内藤　はいはいはいはい。水野さんの魅力てそういうとこですよね。ファインダーから覗いていると、いつもとんでもない大っきなモノを見たはる目をしていて、なんか、ガンバレーって応援したなるんですわ。

西崎　そして我々はサーキットの呪術師集団と化す。"勝利を祈る力"と"昇太を心配する力"なら誰にも負けない。

（一同笑）

水野　そういって応援してくれているスタッフの人たちにははんま感謝してます。もちろん読者の人たちにもです。今、スタッフや読者に応援のお礼できることといったら、仕事先のジェミニカートでカートを教えることぐらいしかできないけど、遠慮なく遊びにきてください。エエ仕事しまっせ。

（一同爆笑）

内藤　ホンマですか？　それやったら僕、いっぺんカート乗りに寄せてもらいますわ。

小宮山　へぇ、確かに昇太がカート教えてくれるのはスゴイなぁ。だけど、みんなが昇太に一番求めることは、常にトップをとって"速い"姿を見せることだよ。そして、早いとこF3000レーサー、いやF1レーサーになって自分の夢、いや皆の夢をかなえてほしいね。

西崎　そうそう、今年こそ、どんなときでも"前へ"つき進む、本来の昇太をファンは見たいはずだよ。

水野　それはわかっています。僕の勝負は今からですから。今年のスタートは、たぶんF4というカテゴリーになると思うんですけど、見ていてください。今まで以上に速く、強い水野昇太を必ずお見せします。そしてカテゴリーをあげて、さらに前へ進みますよ。

読者へプレゼントのお知らせ

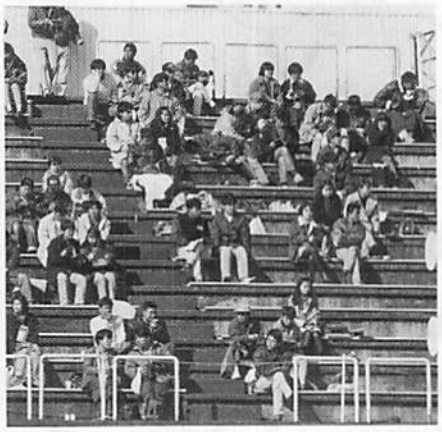
水野昇太の勤めるジェミニカートのオリジナルTシャツを抽選で10名の方へ

応募方法：ハガキに住所・氏名・年齢職業・『前へ』の感想をお書き添え上、（株）クラブフェイム編集部

『前へ』水野昇太Tシャツプレゼント係まで

前へ — FJ—1600

DERECTION SHUHEI NISHIZAKI
TEXT BY AKIHIRO KOMIYAMA
PHOTO BY TAKAYUKI NAKASHIMA



水野昇太選手を応援して下さるスポンサーを募集しています。

(お問い合わせ先)
フェイム事務局
〒604京都市中京区六角通烏丸東入ル
大輝六角ビル2F
Tel (075) 256-7558 担当／西堀・片田

LAP10 SECOND-GUESSING

結果論という言葉がある。

最近、この言葉が最も印象的に聞こえたのはサッカーの94ワールドカップ・アジア最終予選、日本対イラク戦だ。

この試合の翌日から、さまざまな結果論がマスコミはもとより世間一般でも語られたことは記憶に新しい。

「審判がロスタイムなど取らないで、もっと早くホイッスルを吹けば…」

「あのショートコーナーの時、カズがファール覚悟でチェックしていれば…」「長谷川を、中山を代えなければ…」

結果論の多くは、このように「こうすれば、こうしていれば勝てたのに」と、負けた結果を悔やむ内容のものがほとんどである。

だが、このときセルジオ越後は決して結果論を語らなかった。

「惜しかったネ。だけど、日本は最高の経験をしたんだヨ。ホイッスルが吹かれるまで試合は終わらないというネ。こういった経験をしたら、必ず強くなる。日本はこれからもっと強くなるヨ」

悪い結果を悔やみ、振り返るのは簡単だ。しかし過去はいくら振り返っても変えることができない。大切なのは、それにチャレンジした経験。その経験を肯定的に考えていくことだ。そうすればきっと未来は変えられる。セルジオの言葉はそんな意味に感じられた。

11月28日富士スピードウェイでインターナショナルF3が行われた。このレースは俗にF3レーサー世界一決定戦といわれている。

この日、水野昇太も富士にいた。

F3のメインレースが行われる前、同時開催されるFJレースでマシンを走らせるために来たのである。このレースは、表向きメインレースであるF3のアトラクション的感覚で行われているのだが、実質はFJレーサーの日本一決定戦。ここで勝つことは彼のこれからのレーサーとしての経歴に一つの栄光として書き加えられる。

10月から調子を取り戻した彼はもちろん優勝を狙いにいく、いや、必ず優勝しなければいけないレースであった。

ところが結果は、予想外の11位。

練習走行の際、F3のチームピットからも「アイツ、いい走りしてるな」という言葉がでてくるほど好調なムードをもっていた彼からは想像もできない順位だった。

「ん〜、負けは負けですよ。正直いって愚痴のひとつも言いたいけど、結果論になりますからね。自分が決めて走ったんだから仕方がないです」

流石にレース後の彼の言葉からは、いつもの元気さが消えていた。だが、このとき、彼のいいたかった愚痴、つまり、結果論とは何だったのだろう。

彼はいくら聞いても決してそれを話そうとしなかったが、それはマシンをニューモデルに乗り換えたことではないだろうか。

このレースから彼はF4/92から、FV94というマシンに乗り換えていた。このFV94は前のモノに比べてストレートが伸びる、彼にとっては有り難いマシン。

だが、新しいということは当然未知数の部分も存在する。それは、まだ様々な走行データがなく、セッティングが難しいという点だ。

だから、このレースの一週間前にニューマシンに乗れることを知らされても、彼はすぐに喜ばなかった。

「前のマシンよりも速いことはわかっている。だが、速いからといってもまだ乗り慣れていない。走り込まなければ、マシンコンディションがベストの状態で走れるかどうかはわからない」

彼は喜びよりも先に、たぶんそういった不安を感じたに違いない。

このレースは、年間を通して行われているシリーズ戦のひとつとはワケが違う。カテゴリーが上のF3のチームも注目している、どうしても勝たなければならないレースなのだ。

「勝負の定石からいえば、当然乗り慣れて調子の上がってきた今までのマシンに乗るべきだろう」

結果論の好きな評論家モドキはきっとそういうに違いない。

しかし、彼は違った。勝負の定石を選ばなかったのだ。そして結果は惨憺たるもの。

だから、先述したレース後の彼のコメントには、きっとこんな想いがこめられていたのだろうと思っていた。

「シマッタ! 定石通りにしておけばよかった。でもいまさら結果論でモノをいっても始まらない」と…。

だが、実際の彼はそんな想いを少しも描いていなかった。

12月5日岡山・TIサーキット英田で行われたFJレース最終戦。ここでも彼はニューマシンに乗ったのである。この最終戦は、彼が4位以上の入賞を果たせばポイントでシリーズチャンピオンとなれる、今年の総決算。

そこでも彼は定石を破ってみせた。シナリオのあるドラマや漫画ならば、彼はここでポールポジションを取り、カッコ良く優勝を遂げるのだろう。が、現実は決して甘くない。

彼のニューマシンは練習走行からトラブルが続き、予選は不本意な13位。

気の早い観衆は既に「定石通りにすればよかったのに」と結果論を語り始めたことだろう。

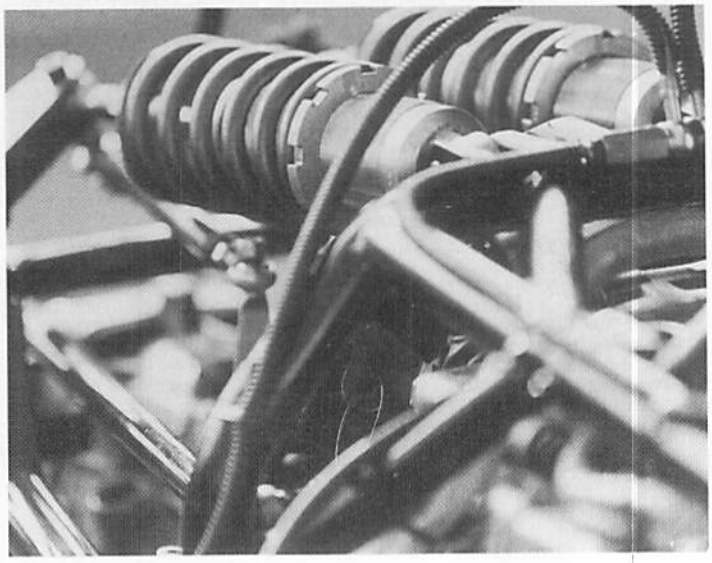
それは決勝レースで見事に的中する。

彼はなんとか持ち前のアグレッシブな走りとテクニックで周回ごとに数台をパス、最終ラップまでに8台は抜き去った。あと1台。が、そこで非情にもチェッカーフラッグは振られた。

総合2位。トップとのポイント差1。これが、今年の彼の成績である。

「前のマシンに乗っていれば…」

誰もがきっとそう思ったに違いない。だが、彼はレース後こう言い切った。「確かに乗っていれば、勝てたかもしれませんね。そしたら優勝してたし、栄光の戦績も残ったのに、惜しいことしたなぁ…。だけど後悔はしてません。だってね、レーサーはカテゴリーを上げるチャンスのときには、たとえどんなマシンでも乗らなくちゃならないんですから。今の段階では戦績にこだわるよりチャレンジだと僕は思うんです」

現役に結果論はいらない。必要なのは経験と未来へのあくなきチャレンジ。

彼はそのことを体で知っている。